

模範愛育班の指定

愛育班を普及し、その活動を充実させるため、次の条件により模範的な愛育班を「模範愛育班」として指定し、見学実習の場とします。

1. 愛育班組織が確立し、その活動が他の模範となるものであること。
2. 愛育班活動の見学実習地として、本会が行う研修会の研修生又は他市町村の愛育班関係者を受け入れることができること。

令和7年度は下記の愛育班を指定します

埼玉県三郷市母子愛育会

「愛育班員の手記」入選作一覧

優秀作

県 名	氏 名	所 属	タイトル
山梨県	<small>まえざわ</small> 前澤 <small>みよこ</small> 美代子	<small>ふえふきし</small> 笛吹市愛育連合会	一人じゃないと思える安心と信頼 をもてる地域にしたい

佳 作

県 名	氏 名	所 属	タイトル
山形県	<small>まつくま</small> 松隈 <small>ふみこ</small> 富美子	<small>みさわ</small> 三沢母子愛育班	幸せの糸
兵庫県	<small>ごとう</small> 後藤 <small>ひろこ</small> 泰子	<small>たんばしのやまし</small> 丹波篠山市愛育会ひおき 愛育班	語り継ぐこと

手記 優秀作

一人じゃないと思える安心と 信頼をもてる地域にしたい

山梨県 笛吹市愛育連合会
前澤 美代子



愛育班について知ってはいましたが、自分が班員として活動するとなると不安がありました。しかし会議に出てみると、コロナ禍であっても地域の子どもやお母さんのために「声かけ、見守り」を継続している方がいること、コロナ禍の閉塞された環境だからこそ、顔を見て声をかけ、見守ってくださる人の存在は重要だと思いました。また、電子媒体の情報があふれる今だからこそ、思いのこもった活字の「愛育班だより」を良いものにし、迷えるお母さんの支援となるよう検討しました。趣味でヨガを極めている班員はストレス解消のヨガポーズ、年末のお掃除の知恵、地域に伝わる料理レシピなど一年に3回から4回発行しました。近所の方から「愛育だよりが楽しみになった」「温かさを感じる」など感想をいただき、中には、簡単レシピを紹介してほしいという要望があり、班員みんなで、レシピ選択と試作、工程を写真にして掲載しました。班員同士のコミュニケーションが活発になり、愛育だよりのアイデアを出すときが一番楽しい時間となっていました。

愛育班3年目、笛吹市子育て支援課企画で未就学児の保護者を対象とした研修会において、愛育班は託児のお手伝いをしました。研修会終了後、あるお母さんが「うちの子は健診で障害かもと言われ、ずっと外には出さず家で過ごしていました。大丈夫でしたか？」と心配そうに聞いてきました。私たちは「楽しく遊んでいて、ほかの子にもおもちゃを持ってきたり、お片づけをしたりと良い子でした」と伝えると、お母さんは「思いきって来てよかった。この子のためにも良かった」と涙ぐみながら言いました。私たちは「みんなそうやって不安を抱きながら、それでも支え合ってきたのよ。大丈夫」と伝えました。その時、“一人じゃないと思える安心と信頼をもてる地域にしたい”と、愛育班員と保健師さんで誓い合いました。課題はありますが、丁寧な関わりを継続していきたいと思います。

幸せの糸

山形県 三沢母子愛育班
松隈 富美子



昭和8年に上皇陛下、昭和35年に天皇陛下がご誕生された時、私の母と私もそれぞれ同じ年に生まれました。私が生まれた当時はおしめや食べ物、ミルクも無く母乳が出なかった母は貰い乳をするなど、大変な思いをして育ててくれました。

そんな時代に、恩賜財団愛育会が創立され愛育班活動が進められたことに感謝するとともに、この三沢地区で愛育班が結成されたことに何かの縁を感じます。

昭和48年に自然豊かで人柄に恵まれた三沢地区で運営が始まり、妊婦や乳幼児の健康相談を行っていました。平成に入り班員の高齢化により愛育班の存続が難しくなりましたが組織の見直しを図り、広報誌「愛育だより」を発行する等の努力により、令和5年には創立50周年を迎えました。先輩方が地区の幸せを願い絶やさず歩んできた歴史を、つながれた糸のように感じています。

現在は、少子化によりこれまでのような活動が続けることが難しいですが、地区の行事に参加したり、赤ちゃん訪問で手作りスタイのプレゼントを続けるなど、活動を模索しながら、先輩方がつないできた活動の糸と地域の人たちとのつながりの糸をつなぎ続けています。

私が班員になり16年経ちますが、特に思い出されることが2つあります。1つは学童クラブとの交流会で絵本の読み聞かせ後に、子どもたちが班員に向けて一生懸命に絵本を読んでもくれたことです。もう1つは赤ちゃん訪問での子を愛しむ母の姿や抱っこした赤ちゃんの愛らしさです。どちらも心温まる幸せな気分になり素敵なひと時でした。

子どもたちのために活動していたつもりが、私の方が幸せをもらっていると気づきました。先輩たちに励まされ、積極的に取り組むうちに活動の楽しさを知り、今では班員であることが喜びです。

これからも赤ちゃんからお年寄りまで地域全体の幸せを考え、自主的に健康づくりができるよう情報交換をし、糸と糸をつなぐように人と人のつながりを大切に楽しみながら活動していきたいと思います。

語り継ぐこと

兵庫県 丹波篠山市愛育会ひおき愛育班

後藤 泰子



平成7年1月17日、早朝5時46分。大きな揺れに見舞われる。マグニチュード7.3の阪神淡路大震災。

あんな恐怖は初めての経験だった。ベッドから転げ落ちた。一体、何が起こったんだ！どうなったんだ！神戸から60km余りも遠く離れたここ丹波篠山の地で。私は出勤し、つけたテレビに最初3～4ヶ所で火の手が上がっているのを見てからは、それは瞬く間にどんどん拡がり続けた。

「あしたではない!!」「今なんや!!」ひおき愛育班は当時の藤木千皓班長のもと城東公民館に急遽集合。80人の班員がお米を手を駆け付けた。米を炊き、握った。ひたすら握った。おにぎりを握った。

市社協が被災地支援に向かう幸便に、おにぎりを届けた。40日間作り続けた。一万個を越えるおにぎりを食べていただいた。

そのことがNHKの取材を受け、全国に放映されることになる。当時携わったのは藤木班長のみ。現班員15人は回想しながら同じ場所で同じようにおにぎりを作った。黙々と握り続けた。熱い。掌はまっ赤でも一つひとつを大切に握った。当時のこの場の様子が浮かぶ。堅く結んだり柔らかくてすぐにほぐれそうになったり、大きかったり小さかったり、形は不揃いでも笑顔が満ちた。あたたかい心、あたたかい心…と自らに唱えながら握った。私自身ホッコリとした穏やかな刻が過ぎる。

放映された画面に、大きく口を開けほおばり両の手でいとおしむように口に運ばれる様を拝見し、心がふわっとやわらかくなった。

以来、街は素晴らしい復興を遂げた。あの日の冷たさ寒さや数多目にした悲しい光景は拭い去ることはできないけれど、相互に声をかけ合い励まし合った経験は、尊い教訓となつて一つたりとも忘れることはないだろう。

これら体験した震災の記憶は風化させることなく後世に語り継いでいくことの大切さを強く心に刻んでいる。